

小学校英語テキスト再検討

— 中国とタイの英語教科書に学んで —

上 西 幸 治

広島大学外国語教育研究センター

1 はじめに

一般的に、年齢要因からより早い段階で学習を始めることが、外国語習得には有利であると言われている。この基本的概念から、アジア諸国の英語教育においても、小学校段階から英語教育を実施する方向になっている。とはいえ、十分な教育条件を整えて小学校レベルでの英語教育を実施しているかどうかについては、疑問の余地がある。

日本では、2011年から本格的に小学校への英語教育が実施されている。しかし、他のアジア諸国の英語教育と異なり、正式な英語教科としての扱いではなく、外国語活動という名目での実施となっている。奥野（2009）によれば、小学校英語教育の実施はすでに明治時代に行われており、その当時から現在と同じ問題が生じていたと述べている。例えば、英語を指導する教員の問題や使用テキストの問題等である。また、英語力向上に向けた成果を上げようとするれば、授業時間数の問題も関わってくるであろう。これらの問題を十分に解決しておかない状況で、小学校英語教育を実施することは、現場に多くの負担を強いることになり、しいては学習者への不満を生じさせることにも繋がりがかねない。例えば、英語指導者の問題に関しては、英語に対する興味・関心を高めることを可能にするような英語教師を配置する方向には程遠い現状がある。現実、実際の指導は担任教師が行っている学校が大半である。Benesse 教育研究開発センターの小学校教師への意識調査（2012）の中でも、指導者に関しては、ALT や英語に堪能な日本人教師が望ましいにも関わらず、現実には担任が仕方なく英語を教えているところが多いと述べられている。指導歴のない教師が教えるとなると、小学生の英語に対する興味・関心を高めることにはなりにくく、更には英語嫌いを増やすことにもなりうる。Butler & Iino（2005）も、日本において小学校英語教育の政策の曖昧さが混沌とした状況を招いていると述べている。課題となっていることを一つずつ解決しながら、よりよい英語教育の実施を望む次第である。

本研究では、テキスト内容、アルファベットの導入と書く指導及び文法項目「疑問詞」に焦点を当てて、中国及びタイの小学校英語教科書と日本の小学校英語テキスト及び中学校英語教科書を比較検討し、日本の英語テキスト開発及び英語教育推進のために貢献できる内容を模索することを目的としている。

2 中国・タイ・日本の小学校英語教育

中国では2001年から小学校に英語教育導入が公表され、段階的に都市部から導入され、2005年から本格的に実施されている。現在、北京や上海の大都市では、小学校1年生から正式な科目として英語が教えられている。小学校6年生までに600から700程度の単語を履修することになっている。しかし、中国の小学校でも英語教育実施には以下のような問題が生じている（Hu, 2007）。

- 1) 教員不足のため英語教育実施が不十分。
- 2) 資金不足で地方の英語教育が不十分。

3) 地方と都会の間の実施格差。

タイでは1990年代に急速な国際化を果たし、英語は重要な国際語として経済、教育等の分野で重要視された。その中で1996年英語教育必修化となる政策が実施された。具体的には、小学校1年生から週2時間英語を必修科目として、すべての学校に導入することとなった(泉, 2009)。4年生からは週一時間の選択の英語授業があり、更にEPと呼ばれる英語プログラムが導入されている。これは一部の他教科を英語で教えるもので、学習者の更なる英語力向上に一役を担っていると見えよう。また、小学校英語ではリスニングとスピーキングが中心であるが、小学校終了時点までの到達目標を明確にしている。例えば、簡単な複文で話せる、語彙レベルは約1,050語から1,200語、様々な文脈で使用される書き言葉・話し言葉における形式ばった会話や普段の会話を理解するなどが挙げられている(同掲書)。

次に、日本の小学校英語教育の現状について述べてみよう。日本の小学校英語教育では、基本的に聞くことと話すことに焦点が置かれており、読むこと、書くことの指導は原則行われていない。実際、学習指導要領(2008)では、以下のように明記されている。

外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること。(下線は筆者)

アルファベットなどの文字の指導については、例えば、アルファベットの活字体の大文字及び小文字に触れる段階にとどめるなど、中学校外国語科の指導とも連携させ、児童に対して過度の負担を強いることなく指導する必要がある。さらに、読むこと及び書くことについては、音声面を中心とした指導を補助する程度の扱いとするよう配慮し、聞くこと及び話すこととの関連をもたせた指導をする必要がある。(下線は筆者)

外国語を初めて学習する段階であることを踏まえると、アルファベットなどの文字指導は、外国語の音声に慣れ親しんだ段階で開始するように配慮する必要がある。さらに、発音と綴りとの関係については、中学校学習指導要領により中学校段階で扱うものとされており、小学校段階では取り扱うこととはしていない。(下線は筆者)

上記で分かるように、「読む・書く」技能に関しては、小学校ではなく中学校においてそれらの技能向上が行われるように指示されている。それにも関わらず、文部科学省(以下、文科省)が各小学校に使用を促進してきた『英語ノート』の中では、アルファベットが扱われ、アルファベット及び基本的英単語を指導するように要求された内容になっている。このことも含め、小学校における英語教育内容は、各学校またはその担当教員に任されているようである。

上述のように、日本より先んじた形で実践している周囲の国々の英語教育に対する政策には目覚ましいものがある。経済発展が進みグローバル社会が到来する中、各国民の英語によるコミュニケーション能力の向上は、特にアジアの発展途上国においては不可欠なこととなっている。英語力向上を目指す中、重要な課題の一つは学習者が使用する英語教科書である。周囲の諸外国より遅れて小学校英語教育に取り組み始めた日本にとっては、英語教科書を分析・検討することは

他国の教科書の利点を知る上で重要と言える。

3 英語教科書研究

日本を含むアジア諸国（中国・マレーシア・タイなど）における英語教科書の比較研究は近年盛んに行われている。それを簡単に概観すると以下のとおりである。

まず、中学校・高等学校英語教科書比較研究の場合、語彙の視点で日本の教科書とアジア諸国の教科書を比較・検討し、日本の英語教科書の圧倒的な語彙数及び異語数の少なさを指摘している（Hettarchchie, *et al.* 2008; Miura, *et al.* 2008, etc.）。また、文法項目の中で「不定詞」に焦点を当てて、ESLの国（スリランカ）の教科書とEFLの国々（日本・韓国・中国・タイ）の教科書を比較・検討した結果、ESLの国の方が不定詞の全用法を早くから学習者に提示する傾向があり、その頻度も高い傾向があった（Uenishi, *et al.* 2008; Uenishi, *et al.* 2007, etc.）。更に、文法項目の中でも「動詞」に焦点を当てて研究を進め、日本のbe動詞の導入が他国と異なり、一般動詞の過去形導入も他の国々より遅いことが分かった（Abe, *et al.* 2008; Asai, *et al.* 2007, etc.）。

次に、小学校英語教科書の場合を見てみると、語彙研究ではWatanabe, *et al.* (2008)の中で、中学校・高等学校英語教科書比較研究の場合と同様、語彙数の少なさが指摘されている。具体的には、タイの小学校1年生及び2年生用の教科書の語彙数は、日本のテキスト（5年生・6年生用『英語ノート』）に比べ、4倍ないし5倍というデータ結果が出ている。これは英語授業の時間数の問題や言語教育方針の違いもあるので、単純に比較はできないにしても、検討すべき重要な問題であると考えられる。また、文法項目の中の「動詞」に焦点を当てて比較・検討したものにAbe, *et al.* (2009); Hosaka *et al.* (2009)などがある。更に、コミュニケーション能力向上を鑑みて、文法項目「疑問詞」に視点を当てて英語教科書を比較・検討したものもある（Uenishi *et al.* 2009; Uenishi *et al.* 2010）。その結果、日本のテキストは他国の教科書に比して、語彙の頻度や初出・継続性等において、更に検討が必要であることが分かった。

ここで、文字指導に関わる研究について少し触れよう。景浦（2007）は、「読んだり書いたりする文字の指導については、一つの段階から次の段階へ進む際に、その段階の差をできるだけ低くして、子供の負担をなくす配慮が必要になる」と述べている。更に、具体的な段階的指導の一環として、「絵等と音声を中心として文字と一緒に提示する」「絵等と音声と文字と一緒に提示する」ことを挙げている。その後、「絵や音の助けを借りて身の回りの単語が読める」等の段階に持っていくことが必要となる。同様に、文字を書く指導に関しても、段階的な指導の必要性を説いている。

アレン玉井（2008）も「現場では高学年になればなるほど、文字に対して興味を示す子どもたちの要求を無視することはできないだろう」と述べて、アルファベットの導入を推進することを提唱し、実践研究報告を行っている。また、英語の学習に関して、「音で理解できていることを文字で補ってはじめて十分な知識として定着する」とし、小学校5、6年生の発達段階を考慮すれば、文字導入を積極的に推進すべきだとも述べている。更に、小学校中・高学年の学習段階で、英語の時間だけ文字を導入しないで学習を進めていくことは大変不自然であり、更には子どもたちの英語学習への意欲を低下させる要因にもなりかねないとも言っている。

4 研究方法

テキスト内容、アルファベットの導入と書く指導及び文法項目の中の疑問詞に焦点を当てて、

日本の英語テキストと中国及びタイの英語教科書を比較・検討した。(学習初期の3年間を比較するために、日本のテキストは中学校1年生まで入れている。)

比較対象の英語教科書は以下のとおりである。

- (1) 英語ノート及び *Hi, friends!* (日本の小学校5年, 6年)
- (2) *New Horizon* (日本の中学校1年)
- (3) *Starting Line Students' Book* (中国の小学校1年～3年)
- (4) *Projects* (タイの小学校1年～3年)

5 考察

5.1 アルファベット導入・書く指導

中国と日本のアルファベット導入及び書く指導に関して、英語学習初期の3年間の教科書の各課と文字指導について検討してみる。文字学習に関しては、実際の指導は教科書以外の補助教材を使用したりして学習を促進する場合が多い。しかし本論文では、あくまで教科書上でどのように文字学習が行われているかを探求することを試みている。

5.1.1 日本の英語教科書

まず、今年度新しく小学校用のテキストとして採用されている『*Hi, friends!*』の内容を概観する。課のタイトルの変更はあるものの、ほとんどの内容は、『英語ノート』とほぼ同じ内容で、学習者にとって身近な話題を提示し、英語への興味・関心を高める目的があると思われる。学習指導要領に見るように、小学校段階では「聞く・話す」の音声面に重点を置いた指導を行うことになっているため、5年生段階では簡単にしかアルファベットを扱っていない。

表1 「*Hi, friends!*」の各単元タイトル

Lessons	<i>Hi, friends!1 (G5)</i>	<i>Hi, friends!2 (G6)</i>
1	Hello!	Do you have "a"?
2	I'm happy.	When is your birthday?
3	How many?	I can swim.
4	I like apples.	Turn right.
5	What do you like?	Let's go to Italy.
6	What do you want?	What time do you get up?
7	What's this?	We are good friends.
8	I study Japanese.	What do you want to be?
9	What would you like?	

具体的には、第6課「What do you want?」で大文字を提示し、町の絵の中から大文字を探す活動が入っている。更なるその課では、「Let's Listen」で英語を聞きながらアルファベットの大きな文字を線で結ぶ活動、「Let's Play」の中でカード集めをして集めたアルファベットの大きな文字を書き写す活動も行うようになっている。時間的な制約もあるのであろう、それ以外の課では、ほとんど文字指導を行うようにはなっていない。

6年生用のテキスト『Hi, friends! 2』では、『英語ノート2』の内容とレッスントイトルなど多少変更が見られるが、中身は基本的に踏襲した形で作成されているようだ(表1)。学習指導要領よりも少し踏み込んだ形で、アルファベットの文字指導が導入されているように思える。具体的には、第1課「Do you have “a” ?」で初めて小文字の提示が行われる。更に、町を描いた絵の中にある店などの様々な場所に、小文字入りの英語を表示し、更にそれを書き写す指導が行われている。先ほども記述したように、アルファベットや英単語を読む・書く指導は、音声によるコミュニケーションを補助する役目を果たす程度で扱うことと明記されているため、細かな扱いはなっていない。

ここで、『英語ノート』と『Hi, friends!』のテキストの変更点について触れておきたい。全体的には、『Hi, friends!』は『英語ノート』の縮小版的なテキストとなっており、一部を除いて内容的には大きな変更は見られない。しかし、以下の点で大きな相違が見受けられる。

一つ目は、『英語ノート』にある「Let's Enjoy」が削除されている点である。3つのセクションがあり、『英語ノート1』(5年生用)では、歌やゲームをする内容になっており、『英語ノート2』では歌、世界遺産を知る、そして様々な職業の英語での言い方を学習する内容となっている。5年生の内容は、主として楽しむことに力点が置かれているが、6年生では、英語を楽しむことに加えて知識面にも重点を置いた内容となっている。

二つ目は、『英語ノート1』ではなかったアルファベット指導が、『Hi, friends! 1』では導入されていることである。具体的には、第6課「What do you want?」でアルファベットの大きな文字を提示し書く指導も行うような中身になっている。更に、第7課「What's this?」ではクイズでアルファベットを作る活動が取り入れられている。この点に関して、アルファベット指導が5年生にも導入されていることは、文字指導において前進したと言えよう。

三つ目は、物語を導入する課でも『Hi, friends! 2』では英文が多くなっていることである。『英語ノート2』ではLesson 8「Please help me」の中で物語を導入しているが、絵の中で物語に出てくる英文はテキスト中には表示されていない。一方、『Hi, friends! 2』の「We are good friends.」では、物語の英文をテキストに表示している。この話は、日本では有名な「桃太郎の鬼退治」の話であるが、小学生にとって馴染みのある昔話を取り入れ、児童の英語への関心を高める狙いがあると思われる。しかも、多くの絵が使用されているので、英語で聞いても理解しやすくなっている。同時に、聞きながら英文を確認できるので読むことにも繋がってくる。6年生の終わり頃に英文の表示を多くすることで、中学校への連携を意識したものと言える。更に、物語を英語で理解した後で、学習者自身がグループで相談しながら、独自の物語を作成する展開になっている。その作成した話をグループで演じて、英語での発表まで持っていく工夫もされている。この物語に関して、文字を提示していること、つまり音を中心とした指導を行いつつ、文字で確認をさせることは大いに意義深いことであろう。物語自体は、他のアジア諸国の教科書でも扱われている内容で、児童の関心を高めるには良い題材であると思える。ただ、「桃太郎」の話は小学生低学年用の内容であるので、その点が成長段階に合っているのかどうか、少し検討する必要がある。

『Hi, friends!』で後退していると思える点を指摘すれば、「What do you want to be?」の課である。6年生用テキスト『英語ノート2』第8課「I want to be a teacher.」がそのタイトルに変更になっているのだが、自分の将来の夢を表現するもので基本的にはあまり変わらない内容である。『英語ノート2』では、そのあとの「Let's Enjoy 3」の中で、様々な職業の絵とともにそ

れらを指し示す英語（句）が提示されているので、自分を表現するのに有益であった。しかし、残念ながら新テキストでは英語の語句は削除されている。

中学校1年生段階では、学習者を引きつけて英語学習のやる気を高めるために、教科書の中に様々なトピックを取り入れている。アルファベットや英単語の習得に関しては、それぞれの単元で書く学習をするようになってきている。第一課の前の序文のページで、アルファベットがすでに導入されている。

続く課においては、「Let's memorize English words. (英単語を覚えよう)」で単語を覚えるように促している。また、「Writing Plus 1」「Writing Plus 2」というセクションがあり、英語を書くことを積極的に導入している。「Writing Plus 1」では、学校のホームページを英語で考えていく活動を行い、「Writing Plus 2」では、中学生が外国人の少女から絵葉書を受け取り、その返事を英語で書くように設定がされており、英語を書く活動が積極的に取り入れられていることがわかる。

上記のように、中学校1年生では、書く活動を通して「書く技能」の向上に努めるようになってきている。とはいえ、アルファベットの導入を含む書く指導に関して、小学校と中学校の連携がうまく行われているかどうかはいくぶん疑問が残る。

5.1.2 中国の小学校英語教科書

中国の小学校1年生の英語教科書の内容を見ると、1年生ということもあり、ごく身近な題材「学校」「動物」「果物」などが扱われている（表2）。各課の活動等は課によって異なるが、基本的には四技能の中でも聞く・話すことを中心にしたものになっている。例えば、Unit 1「School」の内容は、挨拶と身の回りの持ち物が中心の単語及び英文が列挙されている。小見出しには、「Look, listen and chat/say」「Let's say」「Let's act and sing」「Listen, draw and say」「Let's act」など、聞く、話す、描く、演じるなどの活動を取り入れている。教科書の各ページには、英語学習に必要な単語と英文が提示されている。この目的は、アルファベット文字を学習することではなく、できるだけ多くの文字に触れさせ、音と文字を結びつけさせ、読むことに繋げることにあると思われる。その際に注目すべきことは、英単語や英文は補完的な要素となっていることである。つまり、教科書の中に興味・関心をかきたてる絵や写真を数多く使用し、その間に英単語や英文が導入されているのである（図1）。絵を多用することで、視覚に訴え、学習者の英語に対する関心を高めようとしていることが窺える。1年生ということもあり、英語を学習させるということではなく、自然に英語の文字に触れさせる機会を多く与えるという程度である。

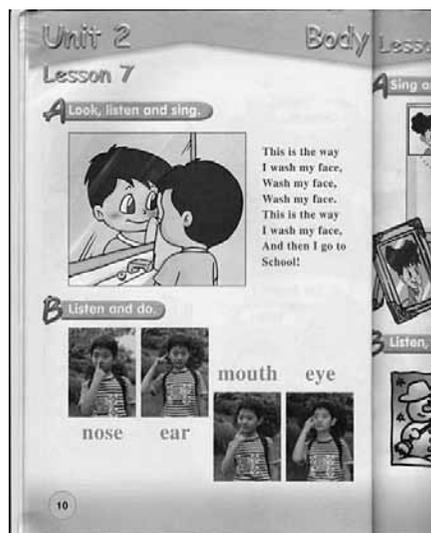


図1 中国小学校英語教科書1年生

表2 中国のアルファベット文字学習（1年生）

Units	Titles	Letters (Let's learn.)	Units	Titles	Letters (Let's learn.)
1	School		9	Classroom	A, S, D, F, G
2	Body		10	My Room	H, J, K, L
3	Animals		11	Toys	Q, W, E, R, T
4	Revision		12	Review	A, S, D, F, G, H, J, K, L, Q, W, E, R, T
5	Numbers		13	Shapes	Y, U, I, O, P
6	Colours		14	Clothes	Z, X, C, V, B
7	Fruit		15	Food and Drink	N, M
8	Revision		16	Review	All characters

更に、特徴的なのがコンピュータのキーボードを使用したアルファベットの導入である。具体的には、指の位置と英語の大文字を繋げてアルファベットを意識させるように促している。コンピュータのキーボードは小学生でも見慣れたものである。それをうまく活用し文字導入をスムーズに行えるように考えられたものであると言えよう。

この文字導入は、学習段階が上がるにつれて、学習者が触れられる単語や英文の量も増加していくように工夫されている。当然の如く、聞くこと、話すことも段階的に増加していき、学習者が英語に慣れていきながら、アルファベットや英単語を書く学習もうまく行えるように配慮されていると言えよう。

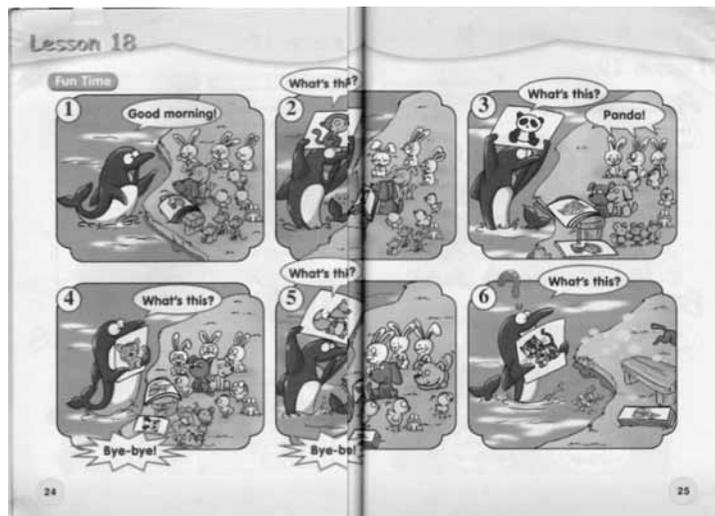


図2 中国小学校英語教科書2年生 Fun Time

小学校2年生の場合も、内容は身近な話題を中心にしている（表3）。各課の活動は、課の話題によって多少異なるが、「Look, listen and chat/say」「Let's play」「Draw and say」「Let's talk」「Listen and draw」など、様々な活動が行われるようになっている。1年生の教科書同様、絵を中心に据え、単語や英文が合間に挿入されている形である。アルファベットの導入に関して、学習段階と関心を考慮して体系的に指導をしている。1年生の英語教科書同様、2年生の英語教科書でも絵と文字を同時に提示し、学習段階に応じて学習者を文字に慣れさせ、音と文字を意識的に結びつけていこうという意図があると思える。

小学校2年生のUnit 9からUnit 11までは、アルファベットのAからTの大文字・小文字とともに、いくつかの単語を書く練習をするようになっている。例えば、Unit 9ではアルファベットのAからGと季節の単語を、Unit 10ではHからNと天気関連の単語を書くことが導入されている（表3）。

更に、各単元の最後の「Fun time」で、文字導入をしながら学習者を短い話に引きつけ、英語を楽しみながら学習ができるように、内容に工夫を凝らしている（図2）。このような心をくすぐる内容の面白さが、学習者の英語への関心及びやる気を高めることに貢献すると考えられる。

表3 中国のアルファベット文字学習及び書く学習（2年生）

Units	Titles	Letters/words (Let's learn/review.)	Units	Titles	Letters/words (Let's learn/review.)
1	Family	f i l y a m	9	Seasons	Aa Bb Cc Dd Ee Ff Gg spring summer fall winter
2	Friends	i e f d s r n	10	Weather	Hh Ii Jj Kk Ll Mm Nn sunny cloudy windy rainy
3	parks	a r s k p	11	PE Class	Oo Pp Qq Rr Ss Tt throw climb jump walk
4	Revision	a e l k	12	Revision	Uu Vv Ww Xx Yy Zz Spring is warm and green
5	Streets	e t s e t s r	13	Time	What time is it? It's 12:00. It's time for lunch
6	Beijing	i i e j b n g	14	My Day	When do you get up? I get up at 7:15
7	Festivals	e l v f I i s t a s	15	The Days of the Week	It's Wednesday today. Let's go and play football
8	Revision	t e r n l a n	16	Revision	4 weeks in a month 3 months in a season 4 seasons in a year 12 months in a year

このように、学習者はアルファベットや英単語に十分さらされながら、読むこと及び次の段階の書くことへと入っていく。そうでなければ、学習者の英語嫌いを増加させていくことにも繋が

りかねない。中国の英語教育では、学習者の情意面（英語学習への不安や神経質になることなど）に十分配慮した英語教育実践を推進する統合的なアプローチがうまくいっていると言えるのではなからうか。

小学校3年の英語教科書でも、1, 2年生同様、様々な活動を通して英語学習を推進するように工夫が行われている。具体的には、英語の歌を歌う、リスニング活動、文字を貼る、描く、更には描いて説明、マッチングや対話を通したゲームなどである。学習者を飽きさせないように、英語学習に引きつけながら学習を進め英語力を高めていく指導である。また、1, 2年生の英語教科書で多くの絵を見ながら音と文字を結び付けて理解しやすくし、読むこと更に書くことへ繋げる指導が行われてきた。2年生途中からアルファベットを書く学習をしているが、3年生では「Learn the letters」という項目の中で、再度書く指導が行われている（表4）。

表4 中国のアルファベット文字学習及び書く学習 (Unit 1-4, Book 3)

Units	Titles	Introduction of Letters (Learn the letters.)	Let's read and write together. Think and write
1	Myself	A a, E e, I i, O o, U u cake bee bike nose music H h, J j, K, k hand jump kite B b, C, c, D d, G g, P p, T t, V v book cat door girl pencil tea, yan (下線部の英字を記入)	() に単語を記入 Dear friend, My name is (). I'm from China. I'm () years old. I'm in Class (). I go to () School. My teacher is (). ...
2	My Body	Y y, Q q, W w, R r yellow queen water rabbit L l, M m, N n, F f, X x, Z z, S s lion mouth nose fish box zoo school (下線部の英字を記入)	Listen, write and say. (Write names suitable for pictures.) Who is Mike? () Who is Tom? () Who is Monster? ()
3	My Food	A __, B __, C __ ... (小文字を記入) Find and color (the alphabet). Fill in the big letters. __ a, __ b, __ c, ... (大文字を記入)	What do you want for the picnic? I want (), () and () for the picnic. Write your favourite food and say: I want (), (), () and () for lunch.
4	Revision	Fill in the big letters. __ n, __ o, __ p, ... (大文字を記入) Let's write (both letters). Aa, Bb, Cc, ... (大・小文字を記入)	Blank with a picture. I want () and () for breakfast. I want a () and a () for lunch. etc.

上述のように、その際、文字とともに絵が必ず提示されている。この指導はBook 3のUnit 4で終了する。その後は単語レベルだけでなく、語句を書く指導も導入されている。低学年の児童には、書く指導だけでは飽きさせる可能性があるので、単語や英文を見ながら色を塗ったり、絵

を描くことも導入されている。このように、中国の小学校1年から3年の英語教科書は、過度なアルファベット指導を入れるのを避け、徐々に書く指導を取り入れて、学習者を飽きさせない取り組みが行われている。その意味では、学習者を配慮し、よくまとめられた教科書であると言える。

上記で検討した文字の提示に関して、まず小学校1年生から英語を教えている中国の大都市の英語教科書では、絵とともに英単語や英文を必ず提示している。しかも、小学校1年生の教科書から、全てのページで絵には必ず英単語や英文が使用されている。3年生からはその量が格段に増加している(3.2参照)。このことは、中国では英語学習の初期段階から四技能を総合的に高めていくことを目指していることを意味している。

学習初期段階での文字導入は、前述したように、まずアルファベットや英単語により多く触れて、慣れさせるためである。その結果、次段階である「読む指導」から「書く指導」への移行がスムーズにいくと思われる。この意味でも、中国の小学校1年生から3年生の英語教科書は、読む・書く技能を高めていく上で、体系的に段階的に英語学習がスムーズに行えるように、うまく編集されていると思われる。

5.1.3 タイの小学校英語教科書

『Projects 1』(Book 1)に関しては、小学校1年生の発達段階に適した身近な内容を活用して、児童の関心を引きながら、英語学習をする展開になっている。具体的には、各単元は「Project」という課で示され、題材は各課の小項目で分かるように、まず「Myself」(学習者自身)を取り上げ、そのあと身近な内容である家族・誕生日・持ち物などを取り扱っている。

アルファベットの指導に関しては、基本的に教科書内容で興味づけしながら、アルファベットを学習させる展開となっている。各課とも基本的にA～F(or G)のパートに分かれている。アルファベットに慣れさせるために、絵とともに英単語・英文を数多く取り入れている。第1課を例にとれば、1Aでは「Hello, Hi」という歌を歌い、次にゲームをし、更に‘Angry Andy’の話を書く展開であるが、すべて英文が表示されている。聞いた英語を文字の英文と何となく一致させ、それを意識させ、更に読むことに繋げる意図があると思われる。最後に、「Make ‘My Name’」でアルファベットのシールを選んで自分の名前を作り、それを絵の具で塗らせる指導となっている。1Bから1Dは、アルファベットの文字を一つずつ取り上げ、それを中心に様々な活動が組まれている。例えば、そのアルファベットの形のものを探す活動やその文字を塗る活動、その文字入りの単語が入った話、英語の歌などである。1Eでは、「My Feelings」で「If you’re happy」という歌を歌い、自分の気持ちを表現する色塗り等を行う活動が行われる。どの課にも共通する内容であるが、最後の1Fでは「Look at Me」の中で、その課で学習した内容や活動を振り返り、今後の学習に繋ぐ展開となってい



図3 タイ英語教科書1年生

る。各活動の最後には、学習者が行ったことに対する気持ちを自問する「Show your feelings」というコーナーがあり、Happy, OK, Angry から選んで自分の気持ちを表現するようになっている。このことにより、学習者の学習内容に対する自己点検を行い、同時に教師にも学習者の情意面を考慮した今後の学習展開等を工夫する参考にもなると思われる。基本的に、1年生が使用するBook 1でアルファベット26文字全ての形を認識し、読み、書く指導に繋げ、その文字が入った基礎的な英単語なども学習するようになっている（表5）。

表5 タイの小学校教科書の単元タイトル（1, 2年生）一部抜粋

	Projects1	Contents	Projects2	Contents
1	Myself	1A: My Name 1B: My A-Ant Book 1C: My H-Hello Book 1D: My I-Ice-cream Book 1E: My Feelings 1F: Look at Me	Myself	1A: My Book about Me (1) 1B: My Book about Me (2) 1C: My Book about Me (3) 1D: Look at Me
2	My Family	2A: My Family Tree (1) 2B: My D-Dad Book 2C: My M-Mum Book 2D: My Family Tree (2) 2E: My B-Brother Book 2F: My S-Sister Book 2G: Look at Me	My Family	2A: My Family Pictures 2B: My Family Clock 2C: My Picture Dictionary 2D: Look at Me
3	My Friends	3A: My T-Tall Chart 3B: My F-Friend Book 3C: My Colour Book (1) 3D: My W-Weight Chart 3E: My Colour Book (2) 3F: Look at Me	Good Friends	3A: My Picture Dictionary (1) 3B: My Picture Dictionary (2) 3C: Look at Me
4	My Food	4A: My Birthday Card 4B: My O-Orange Book 4C: My Food Poster 4D: My Y-Yes Book 4E: My Birthday Party 4F: Look at Me	Bananas	4A: Sun-dried Bananas 4B: My Picture Dictionary 4C: Look at Me

『Projects 2』（Book 2）では、すでにBook 1でアルファベットの文字を一通り確認学習しているが、2年生でも基本的には、学習者に英語に慣れさせていく方法で展開されているようだ。例えば、1 Aでは「Greetings」という歌を歌い、自分の身体と結びつける活動がある。「My Book about Me」では絵を描き、ワークシートを切り取って貼り付けながら、英語に慣れていくように工夫されている。次に、身体の各部位の英語を学習し、それに関わる感覚的な動詞も英文

を使って学習する。例えば、「tongue」であれば「This apple tastes good.」, 「eye」であれば「I can see a bird.」などである。つまり、身体と感覚を結び付けて英語をより理解しやすいように展開している。更に、「Head and Shoulders, Knees and Toes」という歌を歌い、身体に関わる単語を習得する。次に、身体の部位を描いたり、コピーしてその部位の英語をさらに確認するようになっている。1Cになると、自分の好きなことを英語で言う歌を歌い、クラスで「Guess the Action」（何をするのが好きかを英語で言い当てる）ゲームをして、学習した表現を習得しやすくしている。最後に、自己の学習活動を振り返る「Think back」が設定されている。

2年生の教科書になっても、基本的な活動は、歌・ゲーム・絵や文字を描く・シール貼り等である。一点異なるのは、この教科書ではほとんどの課に「My Picture Dictionary」という項目が登場する。これは、絵を描く、文字を書く、シールを貼るなどして、英単語と絵を結び付ける活動である。この活動で完成したシートは、「My English File」に整理されて綴じられる。学習者自身が、復習用に過去の学習成果を振り返ることもでき、描いた絵などを何度も見て英語を学習することで、単語や語句をより認識しやすく、覚えやすくし、より英語学習が捗るように工夫が行われているようだ。

表6 タイの小学校教科書の単元タイトル（3年生）

Titles	Contents	Titles	Contents
All about Us	1A: A 'Who is It' Game 1B: A 'You and Me' Record 1C: 'A Who is Who in Class 3 Board Display' 1D: Look at Me	Country & City Life	5A: Country Mouse and City Mouse (1) 5B: Country Mouse and City Mouse (2) 5C: Look at Me
Home Sweet Home	2A: A House and Home Game 2B: My Family Photo 2C: My Picture Dictionary 2D: Look at Me	It's New Year	6A: My New Year's Day Poster Gift 6B: My New Year's Wish Poster 6C: Look at Me
Keeping Healthy	3A: At the Hospital 3B: Weekly Exercise Bingo 3C: My Bedtime Record 3D: Look at Me	Plans We Eat	7A: My Plant Project: Growing Seeds 7B: My Parts of Plants Card Game 7C: Look at Me
Good Food	4A: My Healthy Dish 4B: Party Food 4C: A Food Party 4D: Look at Me	Care & Clean	8A: My Care and Clean Poster 8B: My No Litter Sign & My Litter Bin 8C: Look at Me

3年生の教科書『Projects 3』でも、身近な題材を取り上げ、歌やゲーム等の様々な活動しながら英語を学習するようになっている（表6）。しかし、出てくる語彙の種類がかなり豊富である。1Aでは身体の部位を示す単語の前にくる形容詞が多く使用されている。例えば、hair という語の前にくる形容詞でも、short, long, straight, curlyなどが提示されている。絵を描き、

語彙を使用しながら、英単語や語句を習得していく方法を強く打ち出してきている。1 Bでは形容詞に関わって比較級を学習する。学習した後は、必ずそれらを使用してコミュニケーション活動を展開する。同時に絵を描きながら、自分のことを英語で記述するようにもなっている。1, 2年生の教科書同様、聞く内容の英文を常に教科書上で提示しているため、聞きながら同時に英語を読むことにも繋げられるようになっている。

次の課では、自分の身体のことから住居（家）のことに学習が移っている。人間であれば住居はhouseであるが、fish, rabbit, bird, horseなら何であるのかを考えさせる。学習者がゲーム感覚でそれを推測しながら学習するように配慮されている。更に、ワークシートで絵を塗り、ペアワークでコミュニケーション活動を行うようにもなっている。最初に、目（視覚）と耳（聴覚）で英語を捉える。次に、それらを認識して口から英語を発していく。更に、コミュニケーション活動を通して、学習内容の理解を深める展開となっている。学習者の感覚に訴えながら学習するこの方法は、英語の習得をより確かなものにする適切な方法であろう。

徐々に学習内容が高度になるが、学習者の発達段階を踏まえ、様々な活動を取り入れ、学習者の情意面や感覚を表現させながら、できるだけ英語に引きつけ、学習者の英語習得を促進していくタイの英語教育指導法は、見習うべきものがあると感じる。語彙に関しても、単語レベルから徐々に文字を視覚的に多く触れさせ、読む、書く指導へと繋げていることも、あまり日本の小学校テキストには見られない点である。

上記したように、中国同様、タイでも1年生から3年生まで英文字に慣れさせ、それを認識させて読む、書く学習へともっていく工夫が行われている。小学生低学年の英語学習に対する思い（英語嫌いにさせないなど）を十分配慮し、より豊富な活動を取り入れて、英語学習をより効果的にする内容となっているのが窺える。泉（2008）によれば、タイの小学校英語教育では、教科書には練習帳などの補助教材がついており、1年生の段階から四技能を扱っている。このことから、文字を書く指導は補助教材を用いて行われていることが推測される。

タイの場合も、多くの絵を使用すると同時に英単語や英文を提示している。学習者が音と文字を意識的に繋げ、音を文字で確認することは意味があると考えられる。小学校低学年でも、このような教科書を使用し英語学習を推進してきているので、日本の小学校高学年の学習者に対して、文字導入を控えていくことは再考すべき点であると考えられる。更には、様々な活動をする中で、「My Picture Dictionary」や「My English File」などの英語活動で作成した作品等を整理し、復習用に使ったりすることも意義深いことである。特に、完成した作品を整理しておくことは、学習者に英語学習を通じたある種の達成感を持たせ、更なる英語学習への動機づけとなることも考えられる。もう一点、タイの英語教科書で特徴的なことは、学習者の情意面を配慮した教科書作りとなっていることである。活動の最後にある「Show your feelings」や「Think back」は、学習者の活動に対する気持ちを自問したり振り返ったりして、学習者自身の学習点検を行い、更なる学習へ繋げていくのに有効であろう。これは、指導する教師にとっても今後の指導の参考にもなると考えられる。

5.2 総語数及び疑問詞比較

まず、中国・タイ・日本の英語教科書の総語数及び疑問詞に関して比較・検討をする。Book 1からBook 3までの総語数及びwh疑問詞の出現回数をグラフに表すと、図4, 5のようになる。

5.2.1 総語数比較

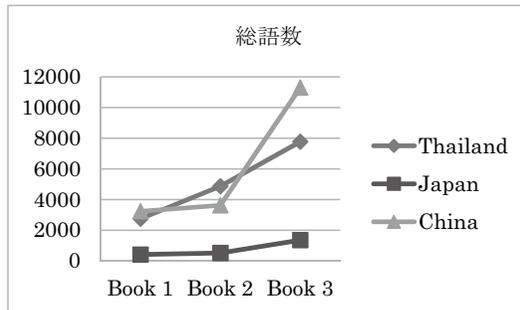


図4 中国・タイ・日本の英語教科書の総語数

各国の英語教科書の総語数から見てみると、日本の英語教科書の総語数は、中国、タイの教科書の総語数よりはるかに少ないことがわかる。これは小学校5、6年生では「聞く・話す」に焦点を当てたテキストとなっており、テキスト自体の量の違いもあるので単純に比較はできないが、総語数が少ないことは明白である。しかも、中国とタイの場合、小学校1年生から3年生用の教科書であり、日本は小学校5年生から中学校1年生の教科書である。教科書の量は各学年の授業時数との関連があるので比較は難しいが、中国とタイの教科書の場合、学年ごとに徐々に語数が増加しており、Book 3ではタイの総語数が8,000語近くで、中国の総語数は11,000語を超える数に達している。一方、日本の英語教科書の総語数に関しては、小学校5、6年生の『英語ノート』は言うまでもなく、Book 3でも2,000語にも及ばない語数である。しかも、日本の中学校1年生の英語教科書の総語数は、タイや中国の小学校1年生の教科書の総語数よりはるかに少ない。今後、教科書作成するには、この点も真剣に検討する必要性を感じる。

5.2.2 wh 疑問詞出現回数比較

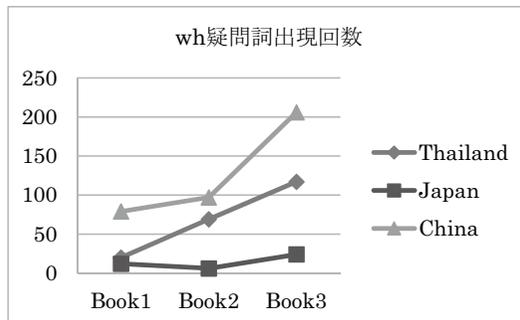


図5 中国・タイ・日本の英語教科書の wh 疑問詞出現回数

ここでは、コミュニケーションを行う際に重要となる wh 疑問詞の出現回数に焦点を当ててみよう。図5が示すように、日本の英語教科書の場合、「聞く・話す」が中心であるため、当然の

ことであるが、総悟数の少なさに比例して wh 疑問詞の出現回数も少ない状況がある。Book 1 ではタイと日本の教科書の wh 疑問詞の出現回数にはそれほど差はない。しかし、Book 2, Book 3 になると両者の間には歴然とした差が生じている。タイにおいては、英語学習初期段階で学年が上がるにつれて、コミュニケーションをする際に必須である疑問詞の使用が、徐々に増加している傾向がある。このことは、中国の教科書でも見られ、タイよりはるかに多い wh 疑問詞が使用されている。

一方、日本の教科書の場合、小学校段階の Book 1 と Book 2 で wh 疑問詞がさほど多くない状況があり、更に中学校 1 年生となる Book 3 で使用する wh 疑問詞の出現回数もそれほど増加していない。中学校への連携を念頭において、「読む・書く」ことを含めた学習者の英語コミュニケーション能力を向上させようとするなら、学習初期段階で wh 疑問詞を含む英文をより多く教科書の中に提示し、視覚的にも学習者により多く英語に触れさせ、定着を図る必要があると考える。

5.2.3 wh 疑問詞頻度数比較

次に、wh 疑問詞の頻度数の観点から各国の特徴を明らかにしていきたい。まず、日本の教科書であるが、5 年生で what と how が提示され、6 年生で新しく where と when、中学校 1 年生で who が新たに扱われている。中学 1 年生については疑問詞 what の頻度数が一番高く、次に、6 年生では扱われていないが how が高い。それに続いて where, when, who となっている (表 7)。しかし、この英語学習初期段階 3 年間において、疑問詞 why は一度も使用されていない。これは what や where などの単純に事実に対する答えを出すものと違って、英語でコミュニケーションをする上で問いに対するその理由を思考して述べなくてはならないために、難易度の高いやり取りが要求されるからであろう。

表 7 日本英語教科書の各 wh 疑問詞頻度数 (1,000語中)

	Book 1 (G5)	Book 2 (G6)	Book 3 (JH1)
What	22.00	7.80	7.36
Where	0.00	1.95	2.21
How	7.33	0.00	5.15
Who	0.00	0.00	1.47
When	0.00	1.95	1.47
Why	0.00	0.00	0.00

次に、中国の英語教科書の wh 疑問詞を検討してみる。日本の教科書と同様、全体的には他の疑問詞に比べて疑問詞 what の頻度数が最も高い。続いて、疑問詞 where, how, who の順で多く扱われている。1 年生という学習初年度の段階で what, where, how, who という 4 つの疑問詞が扱われ、Book 2 では when, why が提示され、5 W 1 H の疑問詞を 2 年生までに学習することになっている。興味深いことは、疑問詞 why がこの早い学習段階、つまり Book 2 で初めて使用され、Book 3 でも扱われていることである。使用場面例を見ると、以下のとおりである。

- Unit 5 A: The traffic light is green. Let's go!
 B: Hurry. The light is yellow.
 C: Hi, Elephant!
 (Elephant looks at bananas.)
 D: Why are you stopping here? Go! Go, Elephant!
- Unit 9 A: What's your favorite season?
 B: Spring.
 A: Why?
 A: It's beautiful! I can wear my red sweater.

Unit 9では単純に、「why?」だけの一語の問いであるが、Unit 5では「Why are you stopping here?」という英文の形で提示されている。疑問詞 why の出現回数は4回と少ないが、この小学校2年生という英語学習初期段階から、whyを使用したコミュニケーション表現を視覚的にも認識させようとしているのには、かなりのレベルの高さを学習者に求めていると感じる。

表8 中国英語教科書の各 wh 疑問詞頻度数 (1,000語中)

	Book 1	Book 2	Book 3
What	14.21	16.00	12.12
Where	5.25	3.59	2.57
How	4.32	1.38	0.80
Who	0.62	2.48	0.53
When	0.00	2.21	1.33
Why	0.00	1.10	0.53

タイの英語教科書では、1年生で who, what の疑問詞が使用され、2年生で how が加わり、3年生で頻度数はとても低いが、where, why の疑問詞が扱われている(表9)。1, 2年生で学習した疑問詞は、次学年でも継続的に学習できるように教科書内に英文で提示されている。段階的に継続的に疑問詞の学習ができるように、教科書内への文字化を行っている。ただ、5W1Hの中で基本的な疑問詞 when のみが提示されていない。小学校英語教科書を作成する際、題材内容等の問題で when が表示されていないのかもしれないが、疑問詞 when の提示は当然行われるべきものであろう。

表9 タイ英語教科書の各 wh 疑問詞頻度数 (1,000語中)

	Book 1	Book 2	Book 3
What	1.45	10.47	5.53
Where	0.00	0.00	0.77
How	0.00	2.46	4.25
Who	5.82	1.23	2.32
When	0.00	0.00	0.00
Why	0.00	0.00	0.77

前節でも記述したことだが、提示語数の差は明らかである。中国とタイの教科書に比して、日本の提示語数はあまりに少ない。中学校1年の教科書でもその傾向はあまり変わらない。それに対して、中国とタイの英語教科書は、学年進行とともに総語数が格段に増加し、wh 疑問詞の出現回数も増えている。各 wh 疑問詞の頻度数に関しては、日本も中国、タイと同様、what の頻度数が高く、継続的に疑問詞を提示している。しかし、日本のテキストでは疑問詞 how は5年生で扱い、6年生では扱われていないという継続性の欠如がみられる。

6 結論

本論文では、日本・中国・タイにおける英語学習初期の英語教科書を比較・検討してきた。特に、アルファベット文字や英単語・英文の導入とその指導及び疑問詞提示に焦点当てて検討してきた。

考察で述べたように、日本の小学校英語テキストを改善していく上で、中国やタイの小学校英語教科書から学んでいくと、以下の点が列挙される。

第一に、実際に英語を読む、書くことが行われる前に、より多くのアルファベットや英単語に触れさせておく必要がある。それをするためには、絵や写真を導入すると同時に、それに関連する英単語や英文を文字として提示しておく方がよいと考える。学習者にとって、教科書を開いた時に、英語が自然に目に入るようにしておき、音と文字を結び付け、読む、書くことに繋げていくことが大切と思われる。実際、小学生も日常生活の中で、看板・音楽・雑誌・テレビ等のマスメディアを通して、すでに様々な英単語や英文を何らかの形で目にしている。したがって、5年生の教科書から積極的に文字を提示することには何ら問題性はないと言えよう。アレン玉井(2008)も述べているように、「音で理解できていることを文字で補ってはじめて十分な知識として定着する」のである。もっと学習者の力を信じて取り入れるべきであると考えられる。

第二に、もっと教科書内容の工夫が必要であるということだ。文字導入に関して、身近なコンピュータ等をもっと積極的に取り入れ、キーボードなどに関連付けて指導をしたり、様々な活動を導入していくなどの工夫をしていく必要がある。また、発達段階に応じて、内容を吟味し、もっと興味・関心を引くような題材を導入する方がよいと考える。中国の英語教科書では、低学年に合ったようなちょっとした笑いとか面白さを取り入れた短い話や題材を取り入れて、学習者に英語学習の楽しみを内からかき立てることができるように工夫している。その結果、英語への興味・関心を更に高め、英語学習を促すきっかけを作っていくことも可能であろう。

第三に、タイの教科書に見るように、学習者の英語学習に対する気持ちや振り返りを行う活動をもっと取り入れるべきである。授業でその日に学習したことに対する自分の感情や気持ちを周囲の人に伝えさせ、お互いに簡単な会話をするを促す活動をもっと取り入れる方がよいと考える。そのことが更なる英語学習の動機づけにも繋がるであろうし、教師の英語指導に対する工夫にも良い影響が出るのではなかろうか。

第四に、文字指導と関連するが、小学校5、6年生に英語を教えるなら、日本の英語テキストでも、提示する語数を増やし、wh疑問詞を含む表現をもっと取り入れたテキストを作成する必要があると考える。小学校高学年の児童・生徒は、「抽象概念を理解し、分析する力を身につけ、興味・関心をますます文字へ向けるようなる」(松川・大下2007)。実際、英単語・英文・wh疑問詞の出現回数には、中国、タイとは歴然とした差があった。コミュニケーション能力を含めた英語力の向上を図ろうとするなら、学習初期段階ではwh疑問詞を含むより多くの英語表現を系統的に継続的に導入する必要がある。更に、ただそれらを聞くだけでなく、視覚的にも英語に触れさせ、読む・書くことに繋げていく学習をしていく必要があるであろう。

最後に、小学校学習指導要領(2008)の外国語活動編を見ると、小学校英語テキストへの文字導入は極めて慎重にあるべきだという流れである。その慎重さは、逆に小学校間格差を助長させることに繋がっているようにも思える。文字導入を積極的に推進し、学習者の読む・書く力を伸長している学校もあれば、文科省の指導要領に沿った内容で、ほとんど聞く・話すのみに焦点を当てて指導している学校もある。このような各学校に任されている現状から生じる学校間格差が、児童・生徒間の格差を生むことになり、中学校での指導の困難さ、英語嫌いの増加や学力差の一因になっているように思われる。その格差を助長しないためにも、地域(市町村)ごとでもよいから、テキストをある程度一貫したものに統一し、中学校への連携がスムーズになるような、学習者にとってより興味深い小学校英語テキストの開発が望まれる。

今後の研究課題として、以下の点が挙げられよう。まず、教科書上だけのことではなく、実際の中国やタイの低学年のための小学校英語教育の実態について把握する必要がある。具体的には、学習初期段階での文字導入がどのような効果を生み出しているのか、読む・書く指導の状況を含めた四技能統合の実態、教師の指導方法や教科書内容に対する学習者の意識、更には指導する英語教員の意識や状況等についても調査・研究を行う必要がある。

参考文献

- Abe, N., Uenishi, K., & Sakamoto, M. (2009). A qualitative analysis of primary school EFL textbooks of Thailand and Japan: Focusing on be-verbs and general verbs. 5th International ICTATLL Workshop Proceedings, 5-16.
- Abe, N., Uenishi, K., Hosaka, Y., & Ozasa, T. (2008). A quantitative analysis of the first-year textbooks of five Asian EFL countries: Focusing on the introduction of verbs. 4th International ICTATLL Workshop Proceedings, 38-47.
- Asai, T., Uenishi, K., Abe, N., & Ozasa, T. (2007). A quantitative analysis of the English textbooks of the five Asian EFL countries: With a focus on verbs. 3th International ICTATLL Workshop Proceedings, 49-57.
- Butler, Y. G., & Iino, M. (2005). Current Japanese reforms in English language education: The 2003 "Action Plan." *Language Policy*, 4(1), 25-45.

- Department of Education, Ministry of Education, Thailand, (2003). *Projects: Play & Learn 1*. Teacher's Council of Thailand, Bangkok.
- Hettarchchige, R. C. K., Hosaka, Y., Miura, S., & Ozasa, T. (2008). Vocabulary of the English textbooks of four Asian EFL countries and Sri Lanka: A quantitative comparison. 4th International ICTATLL Workshop Proceedings, 26-33.
- Hosaka, Y., Ozasa, T., & Uenishi, K. (2009). A quantitative and qualitative comparison between Thai and Japan's primary school EFL textbooks: Focusing on to-infinitive. 5th International ICTATLL Workshop Proceedings, 72-78.
- Hu, Y. (2007). *China's Foreign Language Policy on Primary English Education: From Policy Rhetoric to Implementation Reality*. Unpublished dissertation at Purdue University, Indiana.
- Miura, S., Hosaka, Y., Hettarchchige, R. C. K., & Ozasa, T. (2007). A quantitative analysis of the English textbooks of five Asian EFL countries: With a focus on vocabulary. 3^h International ICTATLL Workshop Proceedings, 138-145.
- Ministry of Education, China. (2001). *Starting Line Students' Book1 (1st & 2nd volumes)*. Lingo Media, Canada and People's Education Press, China.
- _____. (2002). *Starting Line Students' Book2 (1st & 2nd volumes)*. Lingo Media, Canada and People's Education Press, China.
- _____. (2003). *Starting Line Students' Book3 (1st & 2nd volumes)*. Lingo Media, Canada and People's Education Press, China.
- Office of Basic Education, Ministry of Education, Thailand, (2004). *Projects: Play & Learn 2*. Teacher's Council of Thailand, Bangkok.
- Office of Basic Education, Ministry of Education, Thailand, (2005). *Projects: Play & Learn 3*. Teacher's Council of Thailand, Bangkok.
- Uenishi, K. (2010). A comparative study of English textbooks in Japan, Malaysia and Thailand. 15th PAAL International Conference Proceedings, 147-152.
- Uenishi, K., Miura, S., Hosaka, Y., & Akase, M. (2009). A comparative analysis of English textbooks in Thailand and Japan: A focus on phrases with wh-interrogative questions. 5th International ICTATLL Workshop Proceedings, 79-87.
- Uenishi, K., Akase, M., & Ozasa, T. (2008). A comparative analysis of the EFL/ESL English textbooks in Asian countries with a focus on the infinitive. 4^h International ICTATLL Workshop Proceedings, 11-18.
- Uenishi, K., Fujiwara, Y., Miura, S., & Ozasa, T. (2007). A comparative analysis of the frequency infinitive verbs in five Asian EFL textbooks. 3^h International ICTATLL Workshop Proceedings, 108-114.
- Watanabe, K., Ozasa, T., Miura, S., & Fukui, M. (2009). Vocabulary of the primary English textbooks of Thailand and Japan. 5th International ICTATLL Workshop Proceedings, 18-24.
- アレン玉井. (2008). 「公立小学校における効果的なリーディング指導について (1) -アルファベット指導-」千葉大学教育学部研究紀要 第56巻 15-23.
- 泉恵美子. (2009). 「タイ国における英語教育-日本の小学校外国語活動との比較-」京都教育大学教育実践研究紀要 第9号 97-105.

- 奥野 久. (2009). 「小学校学習指導要領における外国語活動の批判的考察—小学校英語教育の歴史と現状を踏まえて—」 *Studies in English Language Teaching*, 32, 53-62.
- 景浦 攻. (2007). 『新しい時代の小学校英語指導の原則』 明治図書.
- 兼重 昇・直山木綿子. (2008). 『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』 明治図書.
- 鈴木康郎. (2007). 「タイにおける小学校英語教育の現状と課題」 Retrieved May 19, 2009, from www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/05120501/s004_4.pdf
- 新里眞男. (2008). 「中学校の連携をどうするのか—成田市の小中一貫の取り組みから—」 英語教育 9月号, 17-19.
- Benesse 教材研究開発センター. (2012). 「小・中学校の英語教育に関する調査」 速報版. http://benesse.jp/berd/center/open/report/syochu_eigo/2011/soku/pdf/soku_all.pdf.
- 松川豊子・大下那幸 (編). (2007). 『小学校英語と中学校英語を結ぶ』 高陵社書店.
- 文部科学省. (2008). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 東洋館出版.
- 文部科学省. (2012). 『Hi, friends! 1』 東京書籍.
- _____. (2012). 『Hi, friends! 2』 東京書籍.
- _____. (2009). 『英語ノート 1』 教育出版.
- _____. (2009). 『英語ノート 2』 教育出版.
- _____. (2005). 『New Horizon English Course1』 東京書籍.

ABSTRACT

A Review of English Textbooks at Primary School in Japan: Learning from Chinese and Thai English Textbooks

Koji UENISHI

Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

This paper reports a comparative analysis of English textbooks from China, Japan, and Thailand. The motivation behind this work lies in the belief that these analyses shed important light on the classroom content of teaching English as a foreign language. In this study, English letters and words are introduced as well as wh-interrogative questions in all three countries' textbooks. The comparison of the content in Chinese and Thai textbooks with Japanese ones can be used to improve future Japanese textbooks in the four following ways.

First, before Japanese students start to learn to read and write English letters and words, they should be exposed to more written English, using letters and words with pictures and photographs as well as seeing only the visuals and hearing the words related to them. Then, English letters and words become more natural for the students when they open their textbooks.

Second, Japanese teachers should have a better approach, in which students are exposed to letters and motivated to learn English. One way is by using drawings of a standard English keyboard. Also, in consideration of the learning/developmental stage, the content in Chinese textbooks seems to be more varied; therefore, tasks appear to be more practice-oriented and imaginative than that in Japanese textbooks. For example, a short story called 'Fun time' is added to each unit of the Chinese textbooks. These stories have an unexpected twist of events at the end. Students may be attracted to such stories and then feel motivated to learn more English.

Third, like Thai primary textbooks, we should produce a textbook with various tasks including students expressing feelings and reflecting on the English learning. It encourages students to develop their English skills, such as conveying their feelings to peers and motivating themselves in English learning.

Fourth, when it comes to teaching English to 5th and 6th grade students at primary school in Japan, we should produce textbooks with more English sentences and useful expressions with wh-interrogative questions. This will help them to develop their English ability in oral communication and also to improve their reading and writing.